



令和元年度海洋水産資源開発事業 (スジアラ養殖)の調査概要



調査場所：水産技術研究所 八重山庁舎
調査期間：平成31年4月～令和2年3月
調査地域：沖縄県

調査の目的

中華圏で市場価値が高く、また国内でも地域特産種として重要なスジアラを南西諸島地域における養殖業の成長産業化の新たな対象種に位置づけ、本事業においてスジアラ養殖の収益性の検討および企業化に向けた課題を整理するため、これまでに開発されたスジアラ養殖の基礎的な技術をもとに養殖実証試験を実施するとともに、市場調査や販売試験等を行う。

本年度調査の主な成果等

1) 養殖実証試験

本年度は、3年級群(H29年度, H30年度, R01年度生産魚)3.8万尾を用いて養殖試験を実施した。H29年度生産魚(2歳)の生産コスト(平均体重500g時点)をH28年度生産魚の結果と比較すると、飼育期間が2~3ヶ月短くなり、生産コストは約15%削減された。しかし、商品サイズ(平均体重600g)に達した時点における体色の赤色の発色が比較的鮮やかな個体の割合は、約10%に留まった。H30年度生産魚(1歳)は収容尾数1.5万尾のうち1.0万尾が死亡(選別除去含む)し、そのうち形態異常魚等の間引きが0.6万尾(約60%)と多く、R01年度生産魚(0歳)の死亡状況も同様の傾向を示し、形態異常魚(種苗生産由来)の多さが問題となった。

2) 市場調査

外部の調査会社に委託して市場調査したところ、中国(香港)にはスジアラの一大市場があり、約1万トンが輸入され、また約0.3万トンの中国産養殖スジアラが流通していることがわかった。その価格はいずれも4千円/kg程度であった。一方、国内の天然スジアラの市場規模は約20トンと小さく、また当機構が養殖したスジアラの希望購入価格は約2~3千円/kgであった。

3) 販売試験

本年度は、昨年度凍結保存したH28年度生産魚1.2トンを中国に輸出し、また国内で0.2トンを鮮魚で販売した。一方、養殖試験期間中に間引いた魚は加工原料(フィレ、魚肉ソーセージ等)として利用できることがわかったが、その量は4.9トンと多く、安価であった。

4) 収益性と課題

中国のスジアラ価格の下落により、本事業の当初計画で想定していた販売価格では採算がとれないため、養殖にかかる経費削減が必要である。また、形態異常魚等の間引き魚が多く、歩留りが低いため、種苗生産技術の向上を含め形態異常魚を発生させない技術開発が必要である。国内市場は小さいものの、3千円/kg以上で鮮魚販売できる販路が開拓されつつある。今後は、養殖技術の改良を進めるとともに、中国への活魚輸出だけでなく、国内の販路開拓も進める。

表1 平均500gに達するまでの期間と生産コスト

年級群	飼育 月数 (ヶ月)	生残 尾数 (尾)	歩留 まり (%)	生産 コスト (円/kg)
H28年度生産魚 全群	26	6,603	32.5	3,618
H29年度生産魚 4月群	24	3,758	45.4	2,923
H29年度生産魚 5月群	23	3,999	30.9	2,974

